

# NEWSLETTER

No.4

岐阜大学国際交流室 1987年9月10日発行

## 私、私の国そして日本

佐藤 マリサ

日本へついでから12ヶ月過ぎました。この一年に日本を実際に見ることができたのは、たいへんうれしいことだと思っています。ペルーの日系三世として私の中に日本人の血が流れているという気持ちがありましたので、日本に強いあこがれがありました。

日本語にもすごい興味がありまして、日本で日本人と一緒に日本語を話せること、そして、私の日本語が日本人に通じることは非常に感激でした。この日本とペルーは実際遠い国ですけれど、私が日本語を話すことによって祖父母の生まれた国、そして日本人が今までよりずっと身近に思えてくるのです。三世としてこのようなすばらしいことはないと思

います。しかし一方では日本へ来てからいろいろな経験をしましたが、その中で外国人にとって異なった習慣や文化に慣れることはあまり簡単ではありませんでした。私が日本へきて、初めて自分の血は日本人の血ですが、考え方は日本的でないことに気がつきました。これが日系人なのです。ペルーにいる日系人のほとんどは、日本のことをもっと知りたいと思いますが、現在はペルーにはいい方法はありません。この岐阜へ来たのはペルーの日系人として私が初めてですから、私はもちろんペルーへかえったら、私が見た日本を多くの日系人の仲間たちに伝えるつもりだけど、これからさらに日本とペルーの関係がもっと良くなることを心から願っています。私はペルーの日系人として、日本とペルーを結ぶ掛橋になればいいと思います。

日本へ来るチャンスを与えてもらって、私は心から感謝しています。そして日本にいる時、私を支えてくださったみなさん本当にありがとうございます。

教育学部家政学科（堀田）



## 自分の国から外国へ

金川聖子セシリア (ブラジル)

私が「自分の国から外国へ」と言うタイトルを選んだのは、私が初めて外国へ出て、日本へ来た事の経験を話したくてたまらないからです。ブラジルでは、日本という国は、現在ものすごく尊敬されてる国で、戦後から短い間にすごく激しいスピードで発展して、国際的に知られているという話がされております。

両親からいろんな話を聞きながら、ブラジルの雑誌や日本の雑誌を見て、日本をファンタジーの様に、夢を見て、イメージを作っていました。私は自分の中で映画の様にさきの事を考えたりしました。夢を見て、飛行機に乗ってる時、その途中で目がさめたりしてがっかりでした。

私は日本に着いて夢がかなった様に感じました。でも夢を見る事と夢を生きる事には差があります。日本は私にとって外国の様な外国じゃない様な気がして、作ったイメージも色々変わったりして、この五か月私が日本の暮しについていろんな場面を見ながら、私の作った映画がとても小さく見えて、新しいものをたくさん経験できて、この国の素晴らしさ、おどろくところも見ています。たとえば、駅で知らない所を聞く時は、もちろん親切な人もいますが、「何でこの人はわからないの？日本人なのに」と言う様な顔で見られたこともありました。私は「外国人ですよ」と言いたかった。くやしかった。

今、私は日本の家庭にホームステイして日本の日常生活の中に入り、日本の教育を見て私の意見も変化しています。「私はまけません」と思いながら、日本語ももっと勉強したい、このおかしな発言もみがあって、日本という国を中から見たい。夢を生きている気分でのこの国のオリエンタル・ミステリーを知りたい、日本の奥を見、今度は外国人としてでなく、日本人としてでなく、いろんな生き方を見て、「人間」というものを、もっともっと尊重して、私は成長して行きたいと思います。

日本の皆さん、私にこんな素晴らしいものを教えて下さった事を心から感謝しております。ありがとうございます。

教育学部治療教育学科 (柚木)

### Macatu Marilou Manuel

One outstanding way to enrich one's self is to live in a foreign community, observe and learn from it without necessarily shelving one's own culture. Living



in Japan for one and a half years has given me this very rare opportunity. The Japanese society itself is a reservoir of knowledge. Being here has exposed me to a culture that is different from mine in many ways, a culture of a people known throughout the world for their industry and discipline. To live harmoniously with the Japanese, judge them not as individuals but as an entity against their history, geographical and social background, because everything that has been going on with them and their country is rooted to these conditions. Their keen sense of sensibility and their exercise of fine distinctions in their activities, customs, and language are really impressive. They have imbued in themselves that success is difficult to achieve, that to achieve goals efforts must be tempered with diligence, patience, and perseverance.

Another good venue for personal growth is the daily interaction with the foreign community at the International House. For me, the International House is a university by itself. It is overflowing with wisdom about people and human relationships. The face-to-face encounter with the residents of the house brought me information which I can't find from books. Desirable values could be learned by observing how people behave here. Relativism, accepting that the concept of good or bad is not absolute, is an important lesson that I have learned from this international community life. In spite of our cultural differences, however, there are common behavioral patterns that transcend nationalities. A deep understanding of these common denominators could foster brotherhood instead of hostility.

I could say that my participation in the Monbusho program has not only enabled me to grow in my field of specialization but in human relations as well. It's a well-rounded education that combines theory and practice - the learning experience are very self-rewarding.

As I look back to the past 18 months, I am filled with joy for am rich with experience and friends. I will always treasure the special bond of friendship that developed from my associations with the Japanese people and the other foreign students. I know that when I go back home to my country, I'll be bringing with me beautiful memories of my experiences here, but most importantly the friendship and unselfish concern that my friends share with me. I believe, there could be no better place and no better way for me to have gained rich experiences than being here in Japan and studying in its academe.

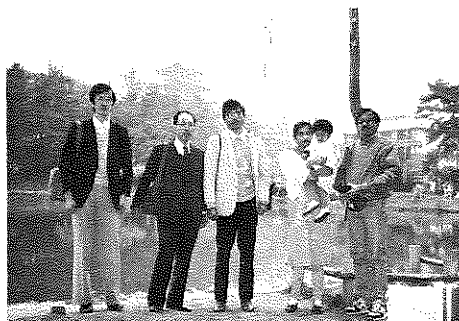
Submitted by;  
Marilou M, Macatu  
(Philippines)

教育学部数学科 (安藤・中馬)

## 私の日本印象記

Dinesh Amaluerkar

私は昭和61年1月、文部省による研究留学生として工学部合成化学科の箕浦先生の指導の下で、光電気化学の研究に携わる機会を得ることができました。暑い国から雪の舞う岐阜の地に着いた途端、インド製の時計が動かなくなったり、右も左も分からず日本語もさっぱり、という状況からのスタートでした。でも、多くの親切な日本人の助けにより、実に楽しい思い出をいっぱいつくることができました。



私はインドの国立化学研究所で Ph. D を取るための仕事をしましたが、そこでの経験と比べてまず気がついたのは、学生がガラス細工から自分の論文の図面書きに至るまで、自分でやることです。さらに電子顕微鏡など大きな装置も含めて自分で操作できることです。インドではそれぞれの専門家がいて、学生は自分ではしません。この日本のシステムは generalist 養成によいという気がします。研究室のゼミでは、学生が英語の研究論文を苦労して読んで説明していますが、学生間の議論が不足しているように思います。また、学生に専門知識を授けることのみならず、学生を versatile personality にするために努力している多くの教官に接し、強い印象をもちました。実際、我が研究室の学生も、実験を熱心にやると共に、先生の奨励(?)で、テニスやソフトボールをしたり、ジョギングを楽しんだりしています。概して、日本の大学は、いわば一種の personality developing center として機能しているように思います。

私はまた新日鉄、松下電器、トヨタ自動車などを見学する機会に恵まれました。その中で、世界最高の品質の生産物をつくり出す日本の労働者の働きぶりも日本固有の文化、spiritual basis と importance of order and sequence が反映しているのではないかと思うようになりました。実は、来日した頃、私は日本という国は westernize された文化国家という印象をもったのですが、盆栽、生け花、茶華道、相撲などを実際にみたりするうちに、それらはいずれも spiritual level で行われることに気づいたのでした。

日本での生活で忘れられないのは、四季の美しさです。冬の雪景色、春の桜、秋の紅葉は驚く程美しいものでした。人と自然との調和の sensitivity は日本文化の基礎であり、それは日本庭園の美しさに代表されているように思います。

すばらしい経験をさせてくださった多くの人々に深く感謝致します。

(箕浦秀樹訳)

工学部合成化学科(箕浦)

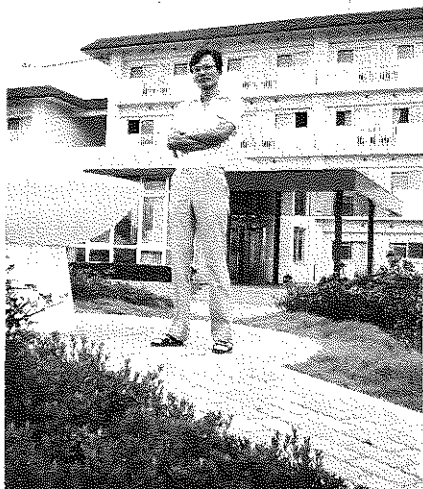
## 国際交流万歳

王 玉 璋

あっという間に二年がたちました。最近、この地球の回転があまりにもすすんでいるのではないかと感じています。この二年間、研究で忙しいこともあったり、スキーでたのしいこともあったり、

風邪で苦しいこともあったり、いろいろありまして、心にいいたいことが一杯ありますが、書くことの下手な私にとってはなかなか表現できないのは事実です。

少しだけといえない人生の経験をしていた私にとっては、日本で、この岐阜大学のキャンパスの中で一人の“外国人”として、この国際的なグループの中で生活するのはたしかにはじめての経験でした。きいたことのないことばをきいたり、たべたことのない料理をたべたり、のんだことのないお酒をのんだりすることはまるでこの小さな会館とちょっと交流室の中でもう一つの世界ができていると感じられています。鄭さんのお酒、ケーシのジョーク、カフィーのコーヒー、世界中いろいろなところからの人達はいろいろなことばをつかって、いろいろな生活習慣をもってここへあつまってきて、民族と政治を越え、たがいにやさしい心をもって平和と友情に溢れている世界をつくりはじめました。小さいけど、すばらしい世界です。まもなく皆とわかれると思うけど、しかし、心に残っています。皆からの友情とはいつまでもわかれることはないと思っています。人間は自分のためにだけ生活しているわけではありません。一人一人“国際人”として私達のこの小さくてやさしい世界をひろげて大きい平和の世界をつくりましょう。



“追い出しコンパ”も目の前で、もうすぐ岐大の皆さん、留学生の皆さん、岐大につながっている道路両側の新栽の若い木達、この若い藤掛先生のリードされている若い国際交流室と“さようなら”と言わなくてはなりません、なんか“さようなら”よりむしろ中国語で“再見”の方が好きですから、たがいに再見にしましょう。いつか、どこかで、またあえるという気持をもって、また再見しましょう。

工学部精密工学科 (古荘)

## 日本を去るにあたり

### Utoomporn Kristanee

まだよく知らないうちにも、見ただけで日本のことをきれいな国と感じました。何回も旅行した後では、どこも便利で安全だと思いました。

一年以上生活して、日本の習慣がだいたいわかってきて、大変いい印象をたくさん持ちました。人々は、しつけがよく、規則を守ります。たとえば横断歩道を緑の信号で渡っている時でも、運転する人は、自分でよく気を付けています。そして運転する前はお酒を飲みません。



人々は正直です。自分のでないものは持って行きません。私は本当に感心しました。一度かばんを忘れたことがあります。一時間半後で気がつき、失くしたと思い残念でした。ところが電話ボックスに行ってみたら、まだ置いてありました。かばんには、パスポートとか外国人登録証とか飛行機の切符とか大切なものが全部入っていたので、見つかった時は、とてもうれしかったです。

さらに、日本人は社会のために協力します。例えば、ミーティングとかパーティーがある時、みんながよるこんで手伝っています。

私は京都を何回も見学しました。きれいな静かな、すてきな所です。それは、日本にとっても貴重な場所です。私は前に京都と奈良は戦争に焼けなかったと聞いた時、初めは多分神聖な場所ですので、ブツダが守ったのだと思いました。けれども日本の友達に聞いた時、アメリカ人が、故意に爆破しなかったのだということがわかりました。言葉で説明しにくいけれど、多分、私と同じことを感じたから、世界の人々のために爆破しなかったのだと思います。京都には、お寺と神社がたくさんあります。静かな心を感じました。私は仏教徒ですので、特に印象が強いと思います。お寺と神社に入った時は、いつもおじぎをしました。

また、日本で互いにあいさつするのを見た時、やさしさと思いやりを感じました。言葉も、尊敬とていねいと謙そんがありますので、それを聞く時、行儀がいいと感じます。そして、そういう所に、日本人独特な所が見えます。

最後に、自分の国の価値に気がつきました。タイに住んでいる時には、自分の国についてあまりにも考えませんでした。でも、ここに一年半くらい住んでいると自分の国と他の国を比べようになりました。私は、独特の生活習慣とタイ語という自分の国の言葉を持っていることを、誇りに思っています。

教育学部英語学科（松川）

## San Diego に留学して

近藤陽子

アメリカ合衆国の西海岸、その南端にある都市が San Diego である。San Diego はアメリカの10大都市のうちの一つということだが、ちょっと目にはそんな大都市にはみえない、日本でイメージする大都市とは異なっていて、初めて San Diego についた時は、なんて田舎なんだろう、と岐阜のド田舎に住む私さえ思ったくらいである。



そんな San Diego に対する私の第一印象も、住んでみるととても住みやすいところだとい

左から2人が私です

うことがわかってくる。その大きな理由は、気候が良いということ。これは、夏は暑がり、冬は寒がりの私にとってはとても快適だった。それに今、猛威をふるっている花粉症、これも San Diego で過ごした3月、4月には無縁のものだった。

このように快適な気候のせいか、私の通っていた San Diego State University (SDSU) には3万人以上という学生が全国から集まっていた。ほとんどの学生は州内の大学であれば授業料が無料であるということからカリフォルニア州内から集まってくるのだが、なかには遠くアラスカから

というような学生もいた。岐阜大学が3千人余りということを考えれば、どれ程の規模がよくわかるのではないかと思う。キャンパスは常に人があふれていて、とても活気があった。特に新学期のはじまりは、満員電車に乗っているようで、人の波をぬって歩かなくてはならないほどだった。

岐大の実に10倍程の学生の中にはいったいどんな人たちがいるのかと興味を持たれるのではないかと思う。この3万人の学生を構成している中で、私の感じたままで見ると、留学生がかなりの数を占めているのではないかと思う。近いところではメキシカン、遠くは日本、中国まで実に様々だ。もちろんヨーロッパ、アフリカ等の国々からもきている。大学の中は、アメリカ合衆国そのもの、国の縮図をみているようでもある。特に強く感じたのは、ベトナム人が思いのほか多い。彼らはベトナム難民としてやってきた人々で、苦勞して英語を学び、そして勉強を続けている。アジア系の人々には国から逃げてきた、という人々がとても多く、もう国へは帰れない、帰ると政府に捕えられてしまうという人も中にはいた。日本からちょっと10ヶ月ばかり交換留学という形で San Diego へ行った私は、アメリカで暮らさなければならぬ、もう国へは戻れない、という思いの人からみれば、気楽なもんだとうつつたことだろうと思う。私には、帰る国があったから、10ヶ月で日本へ戻れるという期限つきアメリカ滞在だったから、やってこれたところがあると思うのだ。

私はアメリカへ行って、むしろアジアの人々について知ることになったわけだが、それまで知らなかったアジアについて知る機会がもてたのは私にとってプラスだったといえる。日本人はどちらかというところと近くの国のことに無関心で、欧米にばかり目を向けているといわれている。私もそうだったし、San Diegoでの体験を経たあとの今でも、つい欧米に目を向けてしまう自分に気づく。地球全体を、世界の国々を、(それはアジアだろうとアフリカだろうと欧米だろうと関係なく)知らなくて、偏った指向のまま、何が国際と叫ぶことができるだろう。そんなふうに自分自身に言いきかせている。これは、アメリカ人が、こちらの思っているほど日本について知らず、かつ無関心であるということをもって感じたことから発している。このような経験をしたことも、自分にとってはよかったのではないかと思う。

つまり、アメリカは、San Diegoは、良い所だけれど甘くはない、ということ。だから私は、アメリカに対して、I like …… but I hate …… ということばをおくりたい。

## 想い出は個人として

時 田 邦 浩

国際交流会館のチューターになったとき、留学生の皆と対等につきあきたいと思った。しかし、彼らの日本人とのつきあいを身近で見ると、それが自分の思い上がりにすぎないと気づかざるを得なかった。

留学生を個人としてとらえている人がどれだけいるのだろうか。多くは、彼らの母国を称して…人という国家的規模でとらえているように感じる。確かに国民性というものも存在するではあろうが、彼らはその代表者ではない。このような日本人の外国人に対する包括的な見かたが彼らに負担を与えているように思えてならない。

自分もそのような見かたをした一人であった。頭の中では、一個人として考えているつもりなのだが……。これが日本人らしさとするれば、彼らにカルチャーショックを与え、日本人は……だと思われるかもしれない。彼らは帰国すると「日本人はどんな人ですか」という質問を受けることになる。そこでは「勤勉だ」と通り一遍の答えよりは「いろんな人がいるよ」と答えて欲しいものである。チューターの任期は切れるが、各々の留学生を個人として記憶の中に残したいと感じた次第である。

# HOT NEWS

## その1

ブラジルのカンピーナス大学から、本学との交流協定に基づく交換留学生として岐阜大学に、昨年の10月より留学している金川聖子セシリアさんに、62年5月に有職婦人の国際組織で国際交流を進めている国際ゾント岐阜クラブから奨学金が支給されました。

ここに国際交流に深い御理解を示してくださった同クラブに感謝いたします。

## その2

留学生にとって、自分の国に手軽に安く国際電話をかけることができないというのは、長い間、大きな悩みでした。しかし4月24日に、国際通話兼用カード公衆電話が、国際交流会館1階ロビーに設置され、これでやっと、電話したい時にいつでも、オペレーターに申し込むことなしに、テレホンカードで自分の国に住んでいる家族との会話ができるようになり、留学生は大変喜んでいました。

---

## 編集 後記

4月に岐阜大学に来た新しい留学生も、5月の末になるとこの大学の空気に慣れて来たように見えます。

さて、去る3月に14人の留学生が、それぞれの思い出を胸に岐阜大学を去りました。そして私達にも、たくさんの思い出を残して……。私達スタッフも、やっと彼らのいない生活に慣れて来たかしら……と思えるこの頃です。岐阜を去るにあたって、何人かの留学生と開館以来、交流会館のアドバイザーとして会館に住んでいた時田さんに、それぞれの思いを書いてもらいました。みんながここに住んでいた頃に、少しタイムスリップしてみませんか。

---